

## 2014 年度 入学 試験 問題

# 国 語

(試験時間 15:00~16:00 60分)

1. 解答用紙は、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。
2. 解答は、必ず解答欄に記入してください。なお、解答欄以外に書くと無効となりますので注意してください。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。また、折りまげたり、汚したりしないでください。記述解答用紙の下敷きにマーク解答用紙を使用することは絶対にさけてください。
4. 解答用紙には、受験番号と氏名を必ず記入してください。
5. マーク解答用紙の受験番号および受験番号のマーク記入は、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないよう特に注意してください。

— 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(50点)

三つ揃いそろいを着てまるまると太った資本家が、お金がいっぱい詰まった袋を手にもちながら、やせこけた労働者たちを汗水たらして働かせている。まだマルクス主義というものがこの世に生息していた古き良き時代のメイドに、ひとびとが持ち歩いていたプラカードの漫画である。

だが、資本家とはたんにお金をいっぱい持っている人間であるというこの常識に反して、御本尊のカール・マルクスはつぎのような定義をあたえている。資本家とは「資本の人格化」である、と。<sup>(1)</sup>資本家がお金を持つのではない。逆に、お金が資本家を持つのである、と。ただし、お金そのものは資本ではない。「蓄積せよ、蓄積せよ！これがモーゼで、預言者なのだ。」資本は利潤を生むために蓄積され、生まれた利潤は資本の拡大のために蓄積される。資本とは、もう一度マルクスの言葉をもちだせば、「自分の価値を拡大すること」を唯一の目的とする「価値の運動」である。もちろん、資本は意識をもっていない。そこで、この運動の意識ある担い手として、価値を無限に拡大させていくことを自分の主体的な動機として内面化した人間が必要とされることになる。それが、資本の人格化としての資本家であるというわけである。

マルクス学者でもないわたしが、<sup>(2)</sup>トウトツにマルクスについてのコウシャクをはじめたのには理由がある。わたしは、マルクスがせっかく資本という概念について抽象的に論じていながら、その人格的な担い手の定義に堪しては十分に抽象的ではなかったと主張したいからである。なにも生身の人間である資本家が資本を人格化する必要はない。民法に「法人」という概念がある。それは、本来は人間ではないが法律上ひとり人間の人間としてあつかわれる物のことである。資本の人格的な担い手とならば、この法人という抽象的な存在で十分なのである。そして、奇妙なことに、資本が法人によって人格化されている資本主義がこの世に現実として存在している。日本の資本主義である。

<sup>(4)</sup>世にルフして<sup>(4)</sup>いるどの経済学の教科書にも、人間と物とは対極的な存在として描かれている。人間は物を所有し、物は人間に所有される。人間は所有の主体であり、物は所有の客体である。人間が人間を所有していたら、<sup>(5)</sup>ドレイ制社会であり、物が人間

を所有していたら、ロボット王国である。だが、ひとたび法人制度が成立し、複数の人間が集まって法人を設立しはじめると、人間と物とのあいだの境界がゆらぎはじめる。もちろん、法人は生身の人間ではないから物である。だが同時に、法人はあたかもひとりの人間であるかのように、みずからの名においてほかの人間や法人と契約を結ぶことができるのである。そのさい、法人を構成している個々の人間は、契約書に直接名前を書きつらねる必要はない。人間でもなければ物でもないというこの法人の両義性を最大限に活用したのが、株式会社という制度なのである。

古典的な資本主義企業においては、個人あるいは同族の資本家が生産手段としての機械や設備を直接所有していた。(そして、やせた労働者を雇って働かせた。)だが、株式会社においては、事情はまったく違う。資本家としての株主が所有しているのは会社の持ち分としての株式でしかない。その代わり、生産手段を法律上所有しているのは、法人としての株式会社なのである。株式会社は、それゆえ、人間としての株主にたいしては所有される客体としての役割をはたし、物としての生産手段にたいしては所有する主体としての役割をはたすことになる。それはまさに物であると同時に人間でもある。

もちろん、株主が過半数の株式を所有して株主総会を支配するならば、生産手段を自由に処分する権限を得ることができる。そのとき会社はたんなるベールとなり、人間と物との区別が復活する。だが、<sup>(6)</sup>ここに逆説が生まれてくるのである。少なくとも論理的には、人間としての法人が物としての自分自身を所有することを妨げるものはないからである。そして、もし株式会社が自分自身の株式を過半数所有して総会議決権を独占することができるならば、それは個人株主という生身の人間の支配から自由になった、純粹な主体になることができるはずである。人間とはほかのどの主体の客体ともならない主体であると、どこかでヘーゲルは書いていた。この意味で、自分で自分を所有する株式会社とは、それ自体が人間になるといつてもよいだろう。たしかに、日本の商法は自社株保有を禁止している。「付記…その後、一九九五年の商法改正で、自社株保有が可能になったが、自社保有の株式には総会議決権をあたえていない。」だが、たとえ自分の株式を所有できなくとも、複数の会社がおたがいの株式を所有しあつて総会議決権を掌握できるならば、個々の会社の単位ではなくグループ全体として自分自身を所有することになり、ヘーゲルの意味での人間になることができるはずである。周知のように、日本のなかではこの抜け道は残されており、

それによっていわゆる系列グループ内の会社がおたがいの株式を持ちあい、会社乗っ取り屋をはじめとする外部の人間の支配からの自由を確保しているのである。

生身の人間としての資本家の支配が排除され、純粹な主体となった法人としての会社が資本の人格的な担い手となる。じつさい、マルクスのいうように資本が自己の拡大を唯一の目的とする価値の運動であるとしたならば、その目的の実現のためには、法人という抽象的な主体が運動の担い手となるほうがはるかに効率的である。法人は肉体をもたず、死すべき人間のように、資本の論理を脅かしかねない自分自身の主体的な欲望や思想をもつことはないからである。人間ではなく法人が主体となった日本の資本主義——それは、ただ拡大のために拡大していく資本主義という社会機構の、まさに純粹形態にほかならないというわけである。

資本主義対社会主義という対立が終焉<sup>しゅうえん</sup>し、ひとびとが資本主義対資本主義というあらたな対立を語りはじめている現在、日本の資本主義についての議論がさかんになっている。そのなかで共通した認識となっているのは、日本の資本主義の中核をなす大会社においては、株主の会社経営にたいする発言権は弱く、経営者は内部昇進によって選ばれることによって従業員集団の代表という性格をもち、その従業員は終身雇用・年功序列・会社別組合といった慣行のもとに会社への強い帰属意識をもっているといったことである。ここから多くの論者は、日本の会社制度が資本主義の論理から逸脱しているという結論をみちびくことになる。いわく、日本の大会社は経営家族主義的であり、人本主義的であり、労資協調ゲーム論的であり、経営者支配的であり、労働者管理企業的である、と。日本は資本主義ではないとか、生産面に結集したしのびよる社会主義であるといった宣言まである。

ここでわたしは、このような標語や宣言の背後にある事実認識にたいして、疑問を提示しようと思っっているのではない。それはわたしも共有している認識である。ここでわたしが指摘したいのは、日本の会社制度の一見すると非資本主義的な特徴は、それが資本主義の純粹形態であることの結果であるという可能性についてなのである。重要なのは、株主が会社の主体ではないということ、そのまま従業員や経営者が会社の主権者や支配者になることを意味するわけではないということである。(たとえ

ば、かつてのバリー・ミーンズ流の経営者支配論をめぐる論争が不毛なものに終わってしまったのは、ヨウゴ派も批判派も、ともに株主が会社を支配しているのか経営者が会社を支配しているのかという二律背反の図式にとらわれていたからである。)

(8)

ただ、いくら人格化された存在であるといっても、会社それ自体には計画を立てる頭も、意志を伝える口も、機械を繰る手も、原料や製品を運ぶ足もあるわけではない。ここに、日本の大会社において経営者と従業員がたす役割がある。かれらは会社の頭や口や手や足といった器官として、計画を立て、意志を伝え、機械を操り、原料や製品を運ぶのである。そして、器官 (ORGANS) とは、たんに語呂合わせではなく機関 (ORGANS) という意味でもある。すなわち、経営者と従業員は、程度の差はあれ、ともに会社を代表する機関として、会社の名のもとに拡大のための拡大というその目的を遂行することになるのである。本来は株主を意味するはずの社員という言葉が、日本では経営者と正規の従業員すべてを指し示すようになってきているのは、まさに象徴的である。

たしかに、従業員の終身雇用・年功序列・会社別組合、さらには経営者の内部昇進といった日本的な労使慣行について、伝統的なイエ制度や戦時下の経済統制、さらには戦後の民主化運動といった非資本主義的な要因の影響を否定することはできない。だが、同時にこれらの慣行が、会社の永続的な拡大を前提とした枠組みとして戦後の高度成長期に普遍化したものであり、しかもそれは、会社の規模を一層拡大するという純粋に資本主義的な目的の遂行のためにはそれなりの経済合理性をもった仕組みとして理解しうることは、最近の研究が示唆するところである。

近年、いわゆるバブル経済崩壊の余塵<sup>よじん</sup>のなかで、つい最近までは成功物語しか聞くことのなかった日本資本主義が、内外のさまざまな批判にさらされるようになった。ここではそれらの批判について論ずる余裕はない。ただ、いえることは、日本の資本主義がはらむ多くの問題点は、それが生身の人間の支配を排除することによって、法人なるものを資本の人格的な担い手とした、資本主義の純粹形態を実現してしまったことから生まれてきたものだということである。いま求められているのは、この純粹な日本の資本主義を「不純」にすることである。メイデーのプラカードに漫画として描くには、たしかにむずかしいスローガンで

はあるが。

(岩井克人「日本資本主義を「不純」に」による)

注　　バーリ・ミーンズ……法学者アドルフ・バーリと経済学者ガーディナー・ミーンズ。一九三二年に共著『近代株式会社と私有財産』の中で、当時のアメリカの企業の多くで所有と経営が分離していることを指摘した。

〔問一〕 傍線(1)「資本家がお金を持つのではない。逆に、お金が資本家を持つのである」の説明として、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 資本家が意識してお金を稼ごうとしなくても、預言が成就するかのようにお金が資本として自ら利潤を生み、蓄積されていくということ。
- B 資本家自身はお金を所有しているわけではなく、ただお金を資本として借り入れて運用しているだけなので、お金に使われる存在だということ。
- C 資本家が運用できるお金は、厳密に言えば、企業の資本なので、資本家はそのお金の所有者ではなく、単なる運用者に過ぎないということ。
- D 資本家は、自分の価値を無限に拡大するという動機でお金をひたすら蓄えようとする点において、資本を人格化しているということ。
- E 資本家にとってお金は単なる所有物ではなく、資本としてひたすら増え続けるものであり、資本家はその人格的な担い手に過ぎないということ。

〔問二〕 傍線(2)(3)(4)(5)(7)のカタカナを漢字に改めなさい。(楷書で正確に書くこと)

〔問三〕 傍線(6)「ここに逆説が生まれてくる」とあるが、本文の筆者はどのような「逆説」が生まれてくると考えているのか。

もつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 自分自身を所有する株式会社は、それ自体が生身の人間になるということ。
- B 人間とはほかのどの主体の客体にもならない主体であるということ。
- C 株主が過半数の株式を所有して株主総会を支配するなら、人間と物との区別が復活するということ。
- D 人間としての法人が、物としての自分自身を所有するということ。
- E 物であるはずの法人が所有の客体であることをやめ、純粹な主体になるということ。

〔問四〕 空欄(8)に入れるのもつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 経営者も従業員も、株主の意向を無視して会社の運営はできないからである。
- B 株主が会社の所有者であることにはかわりはないからである。
- C 法人としての会社それ自体が、会社の主体となることもできるからである。
- D 会社という組織には、「主権者」や「支配者」といったものは存在しないからである。
- E 純粹な資本主義を実現した日本の企業にとって、資本こそが支配者だからである。

〔問五〕 傍線(9)「この純粹な日本の資本主義を「不純」にすること」とはどのようなことか。「会社」、「人間」という語を用いて三十字以内で答えなさい。(句読点は一字に数える)

〔問六〕 次の文ア～オについて、本文の趣旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア 日本で経営者と正規の従業員すべてが「社員」と呼ばれているのは、彼らがまるで会社の頭や口や手や足であるかのように、会社に組み込まれているからである。

イ 生身の人間ではない法人が主体となるような資本主義はいずれは行き詰まり、生身の人間が尊重される社会主義に移行する。

ウ 日本の資本主義は、物である法人が生身の人間を客体として所有しているという点で、一種の「ロボット王国」だと  
言える。

エ 伝統的なイエ制度や戦時下の経済統制、さらには戦後の民主化運動といった非資本主義的な要因がなければ、日本の株式会社はさらに資本主義の純粹形態に近づく。

オ 生身の人間である資本家は、自らの欲望や考えに振り回されることもあるので、資本の人格化としてはふさわしくない。



二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(20点)

『洛中洛外屏風絵』<sup>らくちゅうらくがいびょうがえ</sup>に描かれた現存する最古の能の絵を見ると、賀茂の川原につくられた能舞台にほとんど太鼓橋のような湾曲を描いた橋懸かりがつけられている。その上を女の姿をしたシテが歩いてくるのが見える。それはまさしく橋そのものである。俯瞰する位置から描かれているその屏風絵では、手前に舞台があるから、観客は彼方からやってくる者を迎えるかたちになっている。野外であるだけに、なおさらのこと、そのシテは橋によって区切られた世界からやってくる者のように見える。こうした能舞台の構成は能を彼方から訪れる者によるドラマとしている。ヨーロッパのドラマがなにかがそこで生じて事件がおきるのとははっきりとした対照を示している。

外の世界が引用されるケースは、日本のドラマだけではない。ヨーロッパの劇場でもそうした外の世界の引用はある。エリザベス朝時代の劇場では、それは「空」であった。劇場の天井からのぞいている「空」である。その様式は現在でもパリのオペラ座の天蓋にシャガールの筆によって描かれた青の天空を遊ぶ動物の絵になり、日本の代表的建築家伊東豊雄が設計した「星」のユニットがフランクフルト・オペラ・ハウスの天蓋に浮かびあがることとつながっている。

「橋」はかたちである。「空」はひろがりである。「橋」は彼方から或いは彼方へとむかう方向でありそこには動きがあり移動する流れがある。「空」は垂直の方向をもって人間の上にあって、無限の観念に結びつきながら、そこからなにかが舞い降りてくる場所である。

「橋」も「空」も現実の日常とはかけ離れた世界の記号である。「橋」という記号は対立する二つの要素をもっている。断絶と結合である。そこでは彼方の世界は切りたつものによって日常の世界とは断たれていながら、「橋」によって結ばれている。能にとってその彼方は異界である。異界はだからまったくちがう世界でありながら

(I)

可能な世界である。

「空」はこれとはちがう。それはかたちではない。ひろがりである。そのことではこの現実とつながりを断たれた世界である。そこになにかを見ようとすればそれは観念となる。抽象の高みがそこにはある。ヨーロッパ演劇にとって悲劇の主題が「運命」

であるのはこのこととは無関係ではない。それは人間の力ではどうすることもできないストーリーの力によって生じることである。ストーリーを閉じるのは神の顕現であり、それをデウス・エクス・マキーナ（機械じかけの神）と呼んだのである。それはまさしく空からやってくる神である。そのことは喜劇においても同じであって、最後の大団円は神のみそなわす導きである。<sup>(2)</sup> 説明の必要のない絶対の仲介者として神があらわれる。つまり「空」のもとではストーリーに始めがあり終わりがある。神の意思のもとで終結へとむかつていく力が働いている。

だが能はまったくちがう。「空」のもとでのドラマとこれほど対極にあるものもないかも知れない。そもそも能に登場する神の在り方からしてちがう。この現実とかよいあっているとところで登場する神である。つまり異界の神である。神は人間の姿となつてあらわれて日常の世界にやってくる。それはストーリーの終極に問題を解決するためにやってくるものではない。人間の世界とちよつとはずれたところからやってくるものである。そのちよつとはずれた場所が暗闇の祠<sup>はこ</sup>であつたり森のなかの樹木であつたりするのである。

「橋」はこのちよつとはずれたところからやってくるものための通路である。それはドラマチックな神ではなく、とても人間にちかい神である。「橋」からやってきたものは「橋」から去っていく。ストーリーは幕が降りて終結するのではない。主人公はやってきた道をおつて日常とちよつとはずれた世界へと帰っていくのである。世界の往還である。

ここでは物語の世界は時間の経過によつてそのまま進行していくのではない。去つていったものはまたもどつてくる。そもそも去つていったものが語つていった物語は過去のお話である。能の主流となつた夢幻能の主人公は亡霊である。亡霊が語る世界は過去の日常である。そこにはもはや日常のうちでの解決はなく、ただ成仏することだけが亡霊の願ひである。しかし能の中心はその救済にあると言うよりは、あきらかに自分自身の苦しみ<sup>(3)</sup>を語ることにある。その苦しみの原因となつた過去の日常の世界での事件が中心である。そうでなければ能は単なる宗教劇となつてしまったにちがいない。それ自体はもはや解決しようのない過去に既におきてしまったことである。そのことを語りたがためにシテは登場したわけである。そしてそのことを語りおえる<sup>(2)</sup>とシテは成仏して「橋」をおつてもとの靈的世界へと帰つていくのである。語ることによる浄化である。

「橋」はだから語りの場への登場を示すものである。過去の日常の反復のための回路になっている。「空」のもとでは神は審判者である。それは現実の事件への審判者である。神の登場によってドラマの次元が変わってしまうのではなく、そこでおわるのだ。ドラマはつねに終末論をそこに用意していて、事件の結末において登場人物たちの世界もおわるのである。

(4) 能はけつしておわることがない、と言つてもいい。主人公は橋のむこうの、こことはちよつとはずれたところでその世界をもっているのである。

(土屋恵一郎「能―現在の芸術のために」による)

注 橋懸かり……能舞台で、楽屋から舞台への通路になっている橋。 シテ……能や狂言の主役。 みそなわす……ご覧

になる。 夢幻能……旅人や僧が夢まぼろしのうちに故人の靈に接し、その語りを聴き、舞を見るところという形式の能。

〔問一〕 空欄(1)に入れるのもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 交換      B 往還      C 反転      D 比較      E 類推

〔問二〕 傍線(2)「説明の必要のない絶対の仲介者として神があらわれる」とあるが、なぜか。その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A ヨーロッパ演劇の主題は神だけが知る「運命」に翻弄される人間の姿を描くことにあるから。  
B ヨーロッパ演劇の主題は人間と異界の間を取り持つ神の存在を描くことにあるから。  
C 「空」を理念とするヨーロッパ演劇は神による人間の支配をその中心テーマとするから。  
D ヨーロッパ演劇は人間の「運命」を主題とするために終極の導き手としての神が必要だから。  
E 喜劇でも悲劇でもヨーロッパ演劇は神の意思の力で終結を迎えることを目的としているから。

〔問三〕 傍線(3)「自分自身の苦しみを語ることにある」とはどういうことか。その説明としてもっとも適當なものを左の中から

選び、符号で答えなさい。

- A 能の中心は亡霊が語ることで、過去の日常の苦しみから逃れることにある。
- B 能の中心は亡霊が語ることで、来世で人々の解放を実現することにある。
- C 能の中心は亡霊が過去の日常を語ることで、浄化されることにある。
- D 能の中心は亡霊が語ることで、来世で成仏することにある。
- E 能の中心は亡霊の語りによって、過去と現在を和解させることにある。

〔問四〕 傍線(4)「能はけっしておわることがない」とあるが、なぜか。その説明としてもっとも適當なものを左の中から選び、

符号で答えなさい。

- A 不安定な中世社会を背景として生まれた能は、現世に生きる人々の不安を和らげ哀しみ<sup>かな</sup>をいやすことができるから。
- B 能は人々の住む世界と異界を結ぶ「橋」という構成原理によって、過去の日常を反復することができるから。
- C 能は劇的な終わりをもつヨーロッパ演劇とは異なり、人々に生の世界と死の世界を結ぶ安心感を与えてくれるから。
- D 能の神は人間を裁くのではなく人間に慰めと励ましを与えるために、物語が反復されることが必要になるから。
- E 神の登場によってヨーロッパのドラマは終わってしまうが、能舞台は橋懸かりがあることで人々に親近感を与えるから。

〔問五〕 次の文ア―オについて、本文の趣旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

- ア 能の橋懸かりという舞台構成によって観客は彼方から到来し、やがて去って行く者を実感することができる。
- イ 能に登場する神は解決を求めないが、ヨーロッパ演劇に登場する神は劇の終わりにやってくる解決をもたらす。
- ウ ヨーロッパ演劇で事件の結末が必ず用意されているのは、能の終極で橋の向こうへ演者が消えるのと同じである。
- エ 「空」も「橋」もその意味するものは異なるが、現実の日常とかけ離れた次元をもつ点では共通している。
- オ 外の世界を引用するのがヨーロッパ演劇なら、日本の能は内なる世界を引用することで成り立っている。

三 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(30点)

故少納言入道、人にあひて、「敦親はゆゆしき博士かな。物を問へば、知らず知らずといふ」といはれけり。それを問ひたる人、「知らずといはんは、何のいみじからんぞ」といひければ、「身に才智あるものは、知らずといふ事を恥ぢざるなり。実才なきものの、よろづの事を知りかほにするなり。すべて学問をしては、皆の事を知りあきらむる事と人の知れるは儼事なり。大小事をわきまふるまでするを、学問のきはめとはいふなり。それを知りぬれば、難義をとはれて知らずといふを恥とせぬなり」とぞいはれける。

入道、出家の心付きて後、院にて、宇治左府のいまだ若くおはしけるに参りあひて申していはく、「おのれは出家のいとま申して、すでに法師になり侍りなんす。それにいたまじき事のひとつ侍るなり。才智、身にあまりぬるものは、遂に不運なりと人の申して、学問をものうくせんずる事のかなしきなり。君は撰録の家に生まれて、前途にたのみおはします。かならず学問才智を極めて、しかも人臣の位を極めさせたまひて、おのれ故、人のおこしたらん邪執をやぶりてたまへ」と申されければ、つらつらと顔をまもりて、御目に涙を浮かべて、言葉はなくてうなづかせたまひけり。その後出家して、兩三年をへて後に、左府、風邪の病にわづらひたまひけるに、入道、御訪ひに参じて、御病おもからねば、臥しながら文談したまひけるほどに、「亀の占と周易の占といづれ深し」といふ事をいひ出だして、左府は「亀の占深し」と仰せられけり。入道は「周易深し」と申しけり。その論、ことのほかにしあがりて、文を取り出だし、本文を引くに及びけり。やや久しく論じかたまりて後、入道、遂に負け奉りぬ。さて入道申していはく、「今は、御才智、すでに朝にあまらせたまひにけり。御学問候べからず。もしなほせさせたまはば、一定、御身の祟りとなるべし」と申して出でにけり。この事を自らもいみじき事におぼして、御日記に書かれたり。その言葉にいはいはく、「先年に院にして学問すべきよしを誂へらるる事は、予が二十の歳なり。いま病席の論、二十四の歳なり。なかわづかに四年の間に、才智、すでに彼が許可を蒙る。すべて四年の学問の間、書卷をひらく事、かの一説を忘るる事なし。いま感涙をのこひてこの事を記す」と云々。

(『続古事談』による)

注 故少納言入道……藤原通憲、信西入道。 宇治左府……藤原頼長。 撰籙の家……撰政閑白となる家。

文談……文学や文章など学問について物語ること。 龜の占……龜の甲を用いた占い。 龜卜きびく。

周易……中国周代に起源を持つ、筮竹せいちくを用いた占い。 易筮えいせき。 朝……天子の治める国。 日本のこと。

誂へらるる事……頼まれた事。

〔問一〕 傍線(1)(4)(5)の解釈としてもつとも適當なものを左の各群の中から選び、符号で答えなさい。

(1) 「ゆゆしき博士」

- A 名ばかりの先生  
B 生半可な物知り  
C たいそうな識者  
D 氣品のある学者

(4) 「ものうくせんずる事」

- A 氣が進まずおろそかにしようとする事  
B 不吉なものだとおとしめようとする事  
C 楽なものだと軽々しく扱おうとする事  
D やらなくてよいものと決めてかかる事

(5) 「前途にたのみおはします」

- A 先々も、父の大臣を頼ることがおできになります  
B いずれ、一族の者にあてにされることがおありになります  
C 今後も、経済的に余裕がおありになります  
D 将来、最高の官職が約束されていらつしやいます

〔問二〕傍線(2)「すべて学問をしては、皆の事を知りあきらむる事と人の知れる」の解釈としてもっとも適當なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 学問をし尽くしてしまつと、全てのことを知り諦めがつくようになってしまつと、人々が思っていること。
- B あらゆる学問をした人ならば、この世の全てのことを見通せるようになること、人々が考えていること。
- C 誰でも学問をすれば、世間のことを知り出世の道筋を開くことができること、人々が思っていること。
- D どんなに学問を深めても、全てのことを知り尽くすことなどできはしないと、人々が考えていること。
- E 総じて学問をしたならば、全てのことが何でもわかり明らかにできると、人々が思っていること。

〔問三〕傍線(3)「なり侍りなんず」を文法的に説明したものととして、もっとも適當なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A ラ行変格活用の動詞＋ラ行変格活用の補助動詞＋願望の終助詞＋打消の助動詞
- B 四段活用の動詞＋ラ行変格活用の補助動詞＋完了の助動詞＋推量の助動詞
- C ラ行変格活用の動詞＋四段活用の補助動詞＋推量の助動詞＋打消の助動詞
- D 四段活用の動詞＋四段活用の補助動詞＋完了の助動詞＋推量の助動詞
- E 四段活用の動詞＋ラ行変格活用の補助動詞＋願望の終助詞＋打消の助動詞



〔問四〕傍線(6)「つらつらと顔をまもりて、御目に涙を浮かべて、言葉はなくてうなづかせたまひけり」とあるが、(ア)誰の、

(イ)何と言われたことに対して取った行動か。もつとも適當なものをそれぞれ左の中から選び、符号で答えなさい。

(ア)

- A 故少納言入道
- B 敦親
- C 宇治左府
- D 院
- E 人

(イ)

- A もうすぐ出家するが、その前に言い残したいことが一つあると告白されたこと。
- B まもなく法師になってもらうが、それには苦しみを伴うことが一つあると言われたこと。
- C 才能がありすぎると人々に嫉妬されて不幸になるので、気を付けて下さいと忠告されたこと。
- D 必ず学問も官位も極めて、自ら人々の抱いている偏見を正して下さいとお願いされたこと。

〔問五〕次の文ア～オについて、本文の趣旨に合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア 入道は、自分は物を知らない、と言う学者を評価していた。

イ 敦親は、本当の才智がない人こそ、知ったかぶりをすると考えていた。

ウ 入道は病床にある左府と、易箏と亀卜との優劣を論じあい、最後にわざと負けた。

エ 左府が勉学に励んだのは、入道に認めてもらいたい一心からであった。

オ 左府はわずか四年で、これ以上学問すると身の災いになると入道に言わせるほどの才智を身につけた。